



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学附属図書館報「榆蔭」77号
Issue Date	1989-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66477
Type	journal
File Information	yuin77.pdf





目 次

○国際化に対応した図書館充実	○研 修..... 7
大学院環境科学研究科教授 山村悦夫... 1	「昭和63年度第1回総合目録データベース実務 研修」に参加して(輪木安雄) 8
○カリフォルニア大学とオハイオ州立大学に おける図書館蔵書検索システム	第2回国立大学図書館協議会シンポジウム (東地区)に出席して(山田達雄) 9
情報システム課学術情報掛長 高砂 慶... 3	○電算化ニュース.....10
○昭和から平成にかけての移転作業	○受 贈図書.....12
文学部図書掛... 5	○人事往来.....12
○会 議..... 6	

国 際 化 に 対 応 し た 図 書 館 充 実

大学院環境科学研究科教授 山 村 悦 夫

本学における図書業務電算化は昭和59年6月に「電算化委員会」の設置にはじまり、60年7月に機種決定、11月にシステムの基本設計が終了し、61年4月から北海道大学図書館オンラインシステムとしてスタートした。遡及入力については本年1月末現在までに、附属図書館(法学部及びスラブ研の一部を含む)、教養分館、経済学部、言語文化部の和・洋書はほぼ終了、文学部と教育学部の和・洋書を現在入力中で、遡及入力冊数232,322冊、北大DB総登録冊数358,914冊、学情センター登録件数229,108件となっており、データ量の増加によって検索回数は増加しているようである。この検索端末を利用していると、18年前に留学したペンシルベニア大学の巨大な図書館を思い出した。その当時、この図書館では、既に電算化がなされ、蔵書の検索や貸出し状況が一瞬に検索できたのには驚かされた。さすが世界最初のコンピュータ「ENIAC」を作製した大学と感心したものであった。この図書館は大変利用しやすく、夜の12時まで開館しており、終灯まで研究を続けることができた。特に、その当時は1ドル360円時代で、貧乏学生にとって教科書、参考書を買入するのが大変であったが、図書館には、これらの蔵書が数十冊と用意されており、大変助かった。また驚いたことには、世界各国より留学生が集まっており、国際色豊かで私の学んだ専攻でも半分以上は留学生で、大学院生のアパートも米国学生と区別なく生活するようになっていた。

昭和63年11月1日現在、本学における留学生は315人で、国費が156名、私費が159名

で、ほとんどは大学院レベルの院生や研究生で、学部学生はわずか12名にすぎない。このように一学部に相当する留学生数であるが、すべて定員外の扱いとなっている。

大学院環境科学研究科は設立されて10年目をすぎたが、我が国唯一の博士課程を有する大学院研究科で、欧米の有名な大学院大学でPh.Dを取得できるように、当研究科でもPh.Dを取得できる。さらに現在の地球規模的環境問題の世界的な高まりによって、世界的にみて人文・社会・自然科学を総合的、学際的、国際的に環境科学を研究できることで、世界各国より留学生が集まってきている。当研究科の一講座にすぎない地域計画学講座においても既に、マレーシア、デンマーク、ノールウェイ(2名)、インドの留学生が研究やPh.Dを取得しており、現在、インドネシア(2名)、韓国、ガーナ(2名)、エジプト、2月にはイランから留学生が入学し、その他多数の国より希望者が殺到している。現在ではやっとペンシルベニア大学のレベルに達し、半分は留学生となっている。この様な世界各国の留学生と研究していると我が国についての経済発展や技術発展・移転がどのようにして行なわれたかについて質問が多い。最近になって、アメリカのヴォーゲルのJapan as number oneなどの本が出版されることになって幾分欧文の蔵書が手に入るようになったが、ほとんどは日本語の蔵書、資料である。そこで欧文の著書、論文や資料等を出来るだけ集めることにしたが、留学生に以上の点を的確に研究できる欧文の蔵書を図書館で見出せなかった。漢字圏以外の留学生にとって日本語は難解で「悪魔の言葉」と思われており、日常会話はともかく、漢字まじりの日本文を読破することは短期間ではほとんど不可能である。本学の図書館も国際化に対応して、我が国をより良く理解してもらうために留学生コーナーを設けて、文学書のみならずこれら関係の蔵書を収集していただければと思う。

発展途上国の留学生の各国の状況を調べると、社会構造が旧体の状態となっている国が多い。このような状況では、先端技術移転を行うことは大変困難となっている。留学生の中には我が国明治期にどのようにして欧米より技術を受容し変容したかに興味を示すものが多い。これは、多分にその当時の社会構造が自国の現在の状況に近いことによるのではないと思われる。しかし、この当時のことを調査研究するとすると、日本の学生にとっても難解な古文書を読破しなければならず、研究は困難を窮めることとなる。その時に、本館の北方資料室には農学校時代の資料や御雇外国人が残した手紙や報告書があり、これらの資料が唯一留学生の手掛りとなっている。しかしほとんどは難解な文章となっており留学生にとっては暗中模索の状況となる。そこで、私が少しずつではあるが、その当時の資料を調べ技術移転がどのように受容し変容していったかを英語で解説し論文を作成中である。少しずつ解明して行くと留学生は大変興味を示し、種々の分野でのモデル規範適応発展過程の解明に取り組むようになった。その中には、我が国の研究者がほとんど問題にしなかった事に興味を示し、その当時の発展史に新しい視点を加えられたことは大きな収穫であった。

現在、我が国は経済発展では世界の大国となっているが、文化・文明については巨大なブラックホールになっていて吸収するのみのように留学生には受けとられているようである。我が国も、そろそろ文化・文明の発信地としての責任が求められているのではないであろうか。その時に、過去、現在と未来が交わることでできる図書館は、益々重要になって行くであろう。図書館も国際化に対応した充実を目指すことを期待するものである。

Library

Library

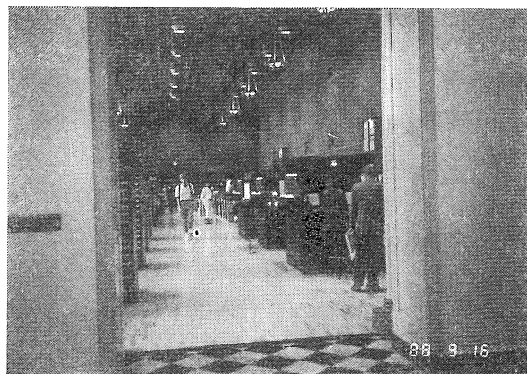
カリフォルニア大学 (バークレー)³⁾とオハイオ州立大学 における図書館蔵書検索システム

情報システム課学術情報掛長 高 砂 慶

昭和 63 年 9 月、北大の国際交流基金事業の一環として、私は標記 2 大学の図書館を見学する機会を与えられ、2 週間の短い旅行をしました。2 大学の図書館の概略と印象につきましては、「北大時報」(No. 418)に掲載されておりますので、ここでは図書館システムの中心ともいえる蔵書検索システムを取り上げ、少し詳しく紹介させていただきたいと思います。

カリフォルニア大学 (バークレー)

バークレーでは、1977 年に目録データのコンピュータへの入力を開始しました。4 年後の 1981 年にオンライン目録を発足させ今日に至っています。オンライン目録には 2 種類あります。一つはメルヴィル (MELVYL) と呼ばれる、バークレーを含むカリフォルニア大学 9 校の総合目録であり、もう一つはグラディス (GLADIS) と呼ばれるバークレー校だけの単独目録です。中央図書館の 2 階のサービスフロアには、メルヴィル用の端末、グラディス用の端末そしてカード目録が置かれ、利用者はこれを使い分けています。1977 年以前に受け入れられた図書については、遡及入力が行われているとはいえ莫大な過去の蓄積に対しては予算が十分ではないとのことで、基本的にはカード検索に頼らざるを得ません。しかし、グラディスには既に 209 万冊のデータが入っており、これはバークレーキャンパスの蔵書全体のちょうど 3 割に当たります。グラディスとメルヴィルでは利用目的が異なりますが、利用者は総合目録であるメルヴィルよりもグラディスを多く用いているとのことでした。その理由としては、グラディスが利用に直結しているということの他に、グラディスを包含したシステムであるメルヴィルは、わずか 9 校分の総合目録とはいえ、書誌データの件数は 520 万件、所蔵データは 1,000 万件を超えており、例えば、学生レベルの主題検索を行っても、ヒット件数が多すぎて煩瑣となっている事情もあるように見受けられました。ちなみに「Supply and demand」を検索すると 834 件もヒットしましたが、これはカードケース約 1 本分に該当し、ディスプレイに表示させる限界を超えています。旅行前に北大のシステムで「Supply」29 件、「Demand」43 件という検索結果を得て、どの程度のデータ量の差なのかをひそかに楽しみにしていたのですが、「Supply」については、1,000 件以上あるので次の一つを選択するようとのメッセージが出ました。1. 200 件までの部分表示、2. 再検索、3. Help 機能、4. 終了。このように、メルヴィルのデータ量は、一般語とか一般件名によってヒットする件数が、ディスプレイの表示機能をはるかに超えるところに達していました。



カリフォルニア大学 (バークレー)
中央図書館サービスフロア

メルヴィルの検索方法には、コマンド方式とルックアップ方式の二つがあり選択できます。ルックアップ方式は初心者用で、コマンドを全く知らなくても画面の誘導に従いタイピング操作をしていけば検索できます。しかし、この方式は著者名、書名、件名標目の中から該当のものを単純に検索するだけで、検索の絞りこみはできません。検索のガイドでは、コマンド方式を推奨しています。実際データ量がこれ程多くなると絞りこみの機能がなければ実用的ではありません。いわゆる論理積とか論理差等の機能の他に、検索対象を指定するコマンド自体もその機能の一端を担っています。主要コマンドは次のとおりです。

pa: 個人著者名	su: 件名の中の語
xc: 団体名	se: シリーズ名、シリーズ名の中の語
ca: 団体名の中の語	pe: 雑誌名、誌名の中の語
au: pa, xc, ca のどれか	and: 論理積
xt: 書名	or: 論理和
ti: 書名の中の語	and not: 論理差
xs: 件名	

これらのコマンドの他に、総合目録に必要な所在校の指定とか、著者名あるいは件名をブラウズする機能、前方一致の機能とかが備えられています。

一方、グラディスでは現在、書名中あるいは件名中の語からの検索はできません。メルヴィルと似たコマンドが用意されており検索方法もほぼ同じです。

ti: 書名、雑誌名	se: シリーズ名
ca: 請求記号	su: 件名
pn: 個人著者名 (件名としての著者含む)	all: pn, cn, se, su のどれか
cn: 団体名 (件名としての団体含む)	

メルヴィルにしてもグラディスにしても、外国人である私が端末の前に座りすぐ検索が始められる程単純なものです。検索方法の基本的な考え方は、以前のカード目録の機能をそっくり実現することにあつたようで、コンピュータによって初めて可能となった書名とか件名の中に現れる単語からの検索機能は、有効とは認めつつもあくまでも付加機能としか認めていない様子でした。従って、入力する側の作業も本質的にはカード目録時代と全く同じで標目の下に検索語を整理するという人間介在の目録作業が迷うことなく行われていた事情は次に述べるオハイオ州立大学の場合も同じでした。

オハイオ州立大学

オハイオ州立大学のオンライン目録は、恐らくアメリカの大学図書館の中でも最も初期のものでかつ大規模のものです。目録データのコンピュータへの入力 は 1972 年に開始し、3年後の 1975 年には簡略データにより古い分の遡及入力を完成させ、オンライン目録を利用者に提供します。現在この簡略データをフルデータに置き換える作業を進行させています。データの精粗はあれ、単独の目録として 260 万タイトル、450 万冊もの所蔵全データをオンライン目録で提供している大学はアメリカにおいてもあまり例を見ないと思われます。しかし、オハイオではこれを完成とはみていません。1972 年以前の簡略データは著者、書名、請求記号のみであるため、フルデータによって検索の充実、特に主題検索の充実を図りたいとしています。

ここのオンライン目録は開発が早かっただけに、後発の図書館はその影響を大きく受けたようです。カリフォルニア大学もその一つだったようです。検索はコマンド方式で、aut (著者名)、tls (書名)、ser (シリーズ名)、sub (件名)、ats (著者の姓と書名の組合わせ)、sps (請求記

号)等のコマンドに続けて検索語をタイプして送信キーを押すだけの動作はカリフォルニアと全く同じで、到着早々玄関ホールに端末が並んでいましたので、早速キーボードを叩いて検索してみました。

著者名の検索では、入力した検索語のヒット件数を表示する他に、検索語の前方一致による検索結果も自動的に表示します。例えば、Allen, C で検索すると Allen, C の他に、Allen, C. L. Allen, Clark 等の C で始まる名前をアルファベット順に一行ずつ表示し、かつ、それぞれの該当件数を表示します。件名も同じように、入力した検索語を中心に前後の件名がブラウズできるようになっており、それぞれ該当件数を表示します。件名のブラウジング機能あるいは参照データによる案内は伝統的な手法に則った主題検索手段の提供です。早い時期にコンピュータ目録に切替えたため、機械の能力上の制約があったとはいえ、統制語としての件名を固持し、著者名の典拠を整備し続けようとする点ではその後のカリフォルニア大学も同でした。

自然語か統制語か、あるいは、典拠の有効性をめぐって議論のあるところですが、アメリカの頑固な保守的一面を垣間見ただけでも大きな収穫だったような気がします。

昭和から平成にかけての移転作業

文学部図書掛

文学部研究棟の増築計画が昭和 62 年度に策定され、行動科学科「実験動物舎」の移設、埋蔵文化財の調査作業を経て、昭和 63 年 10 月に研究棟東側に 3 階建の増築工事が完成した。

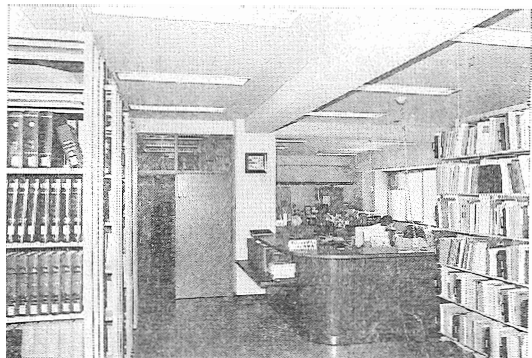
文学部図書室は 1969 年 3 月に落成した現在の文学部管理棟 2 階部分の大半を占めていたが、程なく狭隘化のため、受入・整理担当部分は研究棟 2 階西側の「北方文化研究施設」の使用していた部屋に移転した。また 4 階にあった「辞書室」がそのあとに移転し、参考図書、新着受入雑誌等を所蔵していたが、増加し続ける資料の重圧により床が危険な状況になってきた。

1947 年北大法文学部設置当初、学生の「鉛筆販売」で有名な設備、図書購入費の募金活動で図書の充実に苦勞した法・文・経の各学部も、文系校舎移転時には、書庫のスペースが充分確保されず、図書資料を附属図書館に収蔵した。その後部分的、全面的に附属図書館への図書資料の管理換を図ってきた。

その後も年々増加する図書の収蔵に苦慮しつつ、図書室、参考資料室から離れている講義・演習室 2 室を雑誌等書庫に転用し、それも図書を書架の天板上にまで積み上げる状態になり、ここも加重による床構造の過度の負担が心配されるようになった。

この度の研究棟増築により 2 階部分 (258.36 m²) に従来の「参考資料室」と「図書整理室」が入り、ディドロの 18 世紀近代思想の金字塔とうたわれた「百科全書」Encyclopédie 3 版、1778 年などの辞書・参考書誌、新着雑誌のコーナーと、年間 1 万冊にも及ぶ受入図書等の整理棚、講座毎の整理済図書の配架棚を設置した。

従前は部屋が狭隘になり管理棟の廊下に置いていた目録用カードボックスも図書室入口の近くに配置し、明るい照明の下で



榆 蔭

検索も可能になった。更に複写機も図書室内に移設し、文献複写の利便もはかられた。

1階部分(141.83 m²)は資料庫として利用するため床部分の構造強度をはかり、電動式集密書架を設置して、和・洋雑誌等を収蔵することになった。

この増築部分の完成に伴い、即時に「参考資料室」、「図書整理室」の移転、12月には講義・演習室に分散配置してあった雑誌等の移動。そして年号の改った本年1月末には長期に亘って附属図書館に保管を願っていた図書資料の引取り作業と続いた。

文学部図書室はこれまで永い間掛員も図書資料も分散配置されていたが、新しい部屋で漸くまとまることができた。これに至るまでの関係各位の努力に感謝申し上げると共に、今後平静に業務が進捗するようお願いしつつ文学部図書室からの報告とします。(高橋 忠明)

◆ 会 議

第140回 図書館委員会

と き 昭和63年12月2日(金)>

と ころ 附属図書館会議室>

議 題

1. 理系分館構想について
2. 北海道大学図書取扱規程の廃止について
3. そ の 他

第96回 教養分館委員会

と き 平成元年1月13日(金)>

と ころ 教養分館会議室>

議 題

1. 平成元年度教官指定図書の選定について
2. 昭和63年度後期演習室の使用について
3. そ の 他

図書担当掛長会議

と き 昭和63年10月4日(火)>

と ころ 附属図書館会議室>

議 題

1. 諸報告事項について
2. そ の 他

図書担当掛長会議

と き 昭和63年12月7日(水)>

と ころ 附属図書館会議室>

議 題

1. 北海道大学図書取扱規程の廃止について
2. そ の 他

第62次国立七大学附属図書館協議会

昭和63年度の第62次国立七大学附属図書館協議会は、昭和63年10月21日(金)東北大学の当番で、仙台市において開催され、本館から、大野館長、斎藤事務部長、似鳥情報管理課長が出席した。なお、議題等は次のとおりである。

1. 図書館の将来計画、特に1次資料の集中と分散について
2. 目録データの遡及入力について
3. 国際交流に関する図書館の対応について
4. 学内 LAN と図書館の役割について
5. 大学図書館における公開サービスとそれを推進するための「基金制度」の確立について
6. そ の 他

昭和 63 年度国立大学附属図書館事務部長会議

標記の会議が平成元年1月26, 27日の両日にわたって、鹿児島大学の当番で開催された。この会議は事務部制をし、国立大学附属図書館の事務部長をもって構成されているもので、毎年1回開催されており、当館から斎藤事務部長が出席した。

なお、議題は次のとおりである。

1. 現物相互貸借の促進について
2. 大型計算機センター等と図書館の協力について
3. 課の名称変更に伴う係(掛)名称の整備について
4. 外国人留学生に対する図書館の対応について
5. 保存図書センターの必要性について
6. 4週6休(閉庁方式)に対する対応について
7. そ の 他

◆ 研 修

昭和 63 年北海道大学図書館講演会

この講演会は、本学の図書館職員に対して、学術情報センターに対応した学内及び北海道地区における学術情報ネットワーク形成に資するとともに、図書館職員としての資質の向上を図る目的で昭和63年11月18日(金)に行われたものである。

参加者は、本学図書館職員50名、北海道教育大学2名、室蘭工業大学、帯広畜産大学、旭川医科大学、旭川工業高等専門学校から各1名であった。

なお、講演会の日程は次のとおりである。

(日 程)

9:20～9:50	受 付	
9:50～	開会挨拶	北海道大学附属図書館長 大野 公 男
	講師紹介	北海道大学附属図書館 事務部長 斎藤 現 太 郎
10:00～12:00	講 演	「大学図書館の展望について」 北海道大学教授(附属図書館長) 大野 公 男
12:00～13:00	休 憩	
13:00～15:00	講 演	「図書館の機械化について」 図書館情報大学 助教授 石 川 徹 也
15:00～17:00	講 演	「日米大学図書館会議について」 慶応義塾大学研究・教育情報センター 本部事務室長 洪 川 雅 俊
17:00	閉会挨拶	北海道大学附属図書館 事務部長 斎藤 現 太 郎

「昭和 63 年度第 1 回総合目録データベース実務研修」に参加して

輪 木 安 雄

さる昭和 63 年 9 月 2 日から 9 月 28 日の 4 週間にわたり、標記研修が学術情報センターでとり行われた。本研修は、講師養成を目的として昭和 60 年度に始められ、今回で通算 6 度目でインストラクターも延べ 78 名を数えるに至っている。昭和 63 年 11 月時点での接続館数が 76 館というから、単なる割合からすれば、丁度、各接続館に 1 名の講師が養成されたことになる。参加したメンバーは、すでにコンピューターを導入稼働している国立大学からの 13 名で、オンライン目録システムの実務担当者であり、中堅職員がその大半を占めた。

カリキュラムは、(1) 学情システム全般にわたる講義、(2) NC データの点検と登録実習、(3) 参照マーク変換に関する解説・実習、(4) 地域講習会実施の要領、(5) その他 NACSIS-IR についての検索実習、等から構成され、当然のことながら 3 日間の地域講習会等とは比較にならない密度の濃いものとなった。

第 1 日目の午前は、恒例による開講式、オリエンテーション、施設見学、ビデオによるセンター紹介がおこなわれ、午後からは早速、目録システム概論、入力基準等本格的に学習が開始された。以降、講義は最終クールまで全てセンター内でスケジュール通り進められたが、研修生は皆熱心に受講した。

講義の中で特に印象強かったものに、NC ファイルと各種 MARC (JP・TRC・LC・UK 等) の点検・実習があった。NC ファイルのダンプリストをみると、日頃、データがどのような形で作成されているか、その様子を窺い知ることができる。まず、最初に感じたことは、書誌の重複が大変多く目についたことであった。それも、コマンド使用ミス、検索もれ等比較的単純ミスによるものと考えられるものが、ことのほか多いと思われた。そのほか、書誌単位の認定基準の「ゆれ」から意図的に重複書誌が作られたと思えるものもあった。いずれにせよ、これらはデータベースの品質管理上大きな問題であり、全国共同分担目録を推し進めるうえで「ゆれ」を最小限にするためにも、豊富な事例を含んだ入力マニュアルの整備が必要であることを痛感した。参照 MARC の実習では、それぞれの MARC がソースデータからどのような仕組みで各データを抽出し、参照ファイルとして位置づけられているかを学んだ。これらは、登録業務のマーク流用入力時には、どのような点に留意すべきかを知るうえで大変参考になるものであった。NACSIS-IR の解説・実習も 2 日間にわたりおこなわれた。残念ながら、NACSIS-CAT の図書総合目録データベースは、まだこの検索サービスシステムには搭載されておらず、実習することはできなかったが、その他の搭載されている各データベースについては、すべて解説され、その後検索実習することが出来た。

まもなく、図書総合目録データベースの NACSIS-IR による検索サービスも開始されることと思われるが、利用者に誇れる、また、使い応えのあるデータベースになるよう願うと共に、目録編纂に携わる者の一人として今後少しでもお役に立てればと思う。

滞在期間およそ 1 か月で、日照時間わずか 30 数時間という異常気象に見舞われ、雨の毎日、大変長く感じられた研修も、つかの間の出来事に思えるこの頃である。日常業務を離れ、およそローカル側では見ることの出来ないシステムの裏側の一端をかい間見せていただいたことは、より良くシステムを利用する上で大変有意義であったと感じている。また、研修を通じて全国各地に多くの友を得られたことも大きな喜びであった。

最後に、このような研修の機会を与えてくれた職場の上司、同僚の方々、また、お世話いただいた学情センターのスタッフの皆さんに紙面を借りて感謝の意を表し、報告に代えたい。

(情報管理課目録掛)

第2回国立大学図書館協議会シンポジウム（東地区）に出席して

山 田 達 雄

今回のシンポジウムは23大学から27名が参加し、学術情報センター目録システムの変更及び学術情報システム特別委員会の報告書「目録情報ネットワークの展開と大学図書館のシステム化」(昭和63年6月)を基に今後の大学図書館の目録業務及びシステム化の在り方を討議するという事で、昭和63年12月8日から9日まで国立婦人教育会館に於いて開催された。

報告書では、①学情センター目録システムの理解のばらつき、②目録レコードの重複書誌の増加、③雑誌目録システムに対する大学図書館の対応の在り方。大学図書館システムに於ける①ハウスキーピング志向と大学独自のシステムを求める傾向、②学情センター目録システムによる大学側の目録データベースの形成及び利用に関する共通の理解が得られていない、などが指摘されていた。

図書館システムでは、目録情報データベースとOPAC(利用者用検索システム)が必要不可欠のものであり、これを支援するものとして一連のハウスキーピングがある。この前提の下に学情センターと接続し、目録情報の作成・利用者用端末の設置によるOPACを推進する為には、学情システムに対応した最適のローカルシステム(各大学図書館)は何か? というのが今回の主要テーマであった。

主要テーマに対して、

1. 学術情報センター目録システム・ソフトウェア(UIP)
2. 学術情報センター目録情報とローカルシステム目録情報
3. OPACの性能
4. ハウスキーピング

の4つのサブテーマが設定されていた。

以下、討議の中で、気付いた特徴的な部分を簡単に述べてみたい。

サブテーマ1では東京学芸大学(日立)、千葉大学(日電)の事例が報告され、採用機種の違いにより学情センターとの接続方法および自館への取り込みの際のコマンド群の比較等が話し合われた。大部分は自館のシステムに習熟している様に見受けられた。

サブテーマ2は新潟大学(日電)、サブテーマ3は弘前大学(日電)の事例があり、ローカルシステム・行モード・画面モード・LANの問題等が討議された。学情センターへの登録の際のケース1(磁気テープ)で対応している大学やOPACでは、一般利用者用に通常の行モードとは別に誘導型の画面モード検索を併用している東大の例も報告されていた。学内LANでは学内共同利用大型計算機使用によるOPACの開発やワープロからの検索等を計画している大学も多かった。

サブテーマ4の事例報告は静岡大学(日立)からであり、トータルシステム(発注、受入、目録、貸出、検索)で全ての業務に使用する事で作業の効率化を計っているが、現状では、応答時間・画面展開や作業量から見てなかなか省力化に至っていない。システム負荷の軽減のた

めのような対応方法を講じているとの報告があった。討議のなかでは先行館でパッケージ開発の際、システム設計上で S・E との交渉過程で未開発となってしまった例や、採用機種に付帯したパッケージがあったが使用していない例、及び使いこなせていない大学等の報告もあり、独自開発のみならずパッケージ使用でのシステム開発の難かしさも改めて思い知らされた次第である。

最終日には参加者全員からの意見発表がなされ、最後に取りまとめが行われた。そのなかで今後の方向性として OPAC を中心にすえ、その支援システムとしてハウスキーピングを考えていくこと。システム開発では、ある程度の融通性のある共通のパッケージ開発が必要である。そのために ① 環境の整備 (業務の整理・学内 LAN と同時にオフコン・マイコンの使用も追求)、② メーカー側への要望の一本化 (ユーザー連絡会の設置と要望の取りまとめ)、③ 職員配置問題 (研修・人材養成)、に取り組んでいくことが必要であると確認された。

国内の各大学で共通な検索システムを共有すると言うことで考えると、5 年後、10 年後には更に改善が加えられ、業務用・利用者検索システムとも一層利用しやすいものが構築されていくであろうと展望された。

また、今回の様に各大学の図書館職員が集り、情報交換ができたことの意義は大きく、今後ともこの会が引き続き開催されることを切に期待する。 (工学部図書整理掛)

◆ 電算化ニュース

システム管理部会

昭和 63 年度 第 3 回 昭和 63 年 10 月 20 日 (木)

1. 学術情報センターの RECON ファイルについて

RECON ファイル生成過程について輪木が説明した。RECON データへの対応について全学共通の方針を図書情報部会で決定する。

2. 図書・雑誌区分について

北大内処理でも学術情報センターの基準を採用する方針とする。これにともなう事務処理・システムの変更点について雑誌情報部会がワーキンググループを設けて 11 月中に原案を作成する。

3. 遡及入力作業における所在情報について

サービス部会から、カードに記載されている所在情報を転記 (入力) しておくべきとの提案があった。管理部会として遡及入力打合せ会議に要望する。

4. 報 告 等

- ・上級プログラム講習について。

作成プログラムの説明・運用について 12 月の掛長会議で報告する。

- ・学術情報センターから学総目 CD-ROM 版のモニター依頼があった。

モニターになる予定である。

- ・雑誌ケース 2 運用開始にともない学術情報センターへの接続 枠を 35 台に変更し部局へ通知した。

- ・分類適用表変更 (DC 16 版から DC 19 版へ) の経緯について問い合わせがあった。(個人←回答: 目録掛)

- ・ローマ字カナ変換機能追加の要望があった。(個人←回答: 情報処理)

- ・利用者専用端末に音順配列キーボードの採用してはどうかを論議。

図書情報システム運用部会

昭和 63 年度 第 2 回 昭和 63 年 11 月 17 日 (木)

1. RECON ファイルの扱いについて

RECON ファイルのデータも原則通り採用することとし、書誌に問題のないものについては、当面の措置として積極的にカレントファイルに移す方向で登録作業を行うこととした。

2. 北大における図書と雑誌の区分のあり方について

雑誌情報部会で検討された原案を提示し、これを各部署に持ち帰り、次回までに意見を取りまとめることになった。

昭和 63 年度 第 3 回 昭和 63 年 12 月 1 日 (木)

1. 北大における図書と雑誌の区分のあり方について

前回の部会で配付の協議資料により検討の結果、原案を大筋のところでは了承することが確認された。ただし、運用面では、実務処理上問題もあるので、付帯条件付きで十分な検討を上部機関に要望することとした。

雑誌情報システム運用部会

昭和 63 年度 第 3 回 昭和 63 年 10 月 13 日 (水)

1. 図書・雑誌区分について

年鑑・年報類のシステム上の扱いを、雑誌システムを用いる方向で統一するため、ワーキンググループを発足させ検討を委任した。

昭和 63 年度 第 4 回 昭和 63 年 11 月 15 日 (火)

1. 図書・雑誌区分について

ワーキンググループの報告を了承し、図書情報管理およびサービスシステム運用部会でも検討するよう依頼することとなった。

サービスシステム運用部会

昭和 63 年度 第 3 回 平成 元年 1 月 12 日 (木)

1. 北大における図書と雑誌の区分のあり方について

システム管理部会より提案された原案について審議した結果、大筋として了承された。なお、実施にあたっては別紙 4 項目 (略) に留意するよう要望することになった。

2. 「研究室貸出図書資料番号順リスト作成」について

資料番号順リスト作成のためのプログラムが完成し、昨年 12 月の全学図書 (担当) 掛長会議において操作説明書を配付した旨報告があった。

3. NACSIS-MAIL について

CLARK システムを通して NACSIS-MAIL を利用するための「NACSIS-MAIL 操作説明書」が配付された。

4. 利用者用端末の「音順配列 (アイウエオ順) キーボード」について

現在、附属図書館でテスト中の「音順配列キーボード」を使ってデモンストレーションを行なった。

5. そ の 他

工学部より、「学科図書室、研究室からもより簡単な方法でクラーク蔵書検索ができるようなシステムを開発してほしい」との意見が出され、システム管理部会に要望することになった。

電 算 化 記 録 (9)

昭和63年10月～平成元年1月

年 月 日	事 項	年 月 日	事 項
63.10.13	63年度第3回雑誌情報システム運用部会	63.11.15	63年度第4回雑誌情報システム運用部会
63.10.20	63年度第2回システム管理部会	63.11.17	63年度第2回図書情報システム運用部会
63.11.1	書庫内雑誌の貸出し・返却業務のオンライン処理開始	63.11.22	日本電気との定例打合せ会議(第38回)
63.11.4	館長を含め来年度の遡及入力計画について検討	63.12.1	63年度第3回図書情報システム運用部会
		1.1.12	63年度第3回サービスシステム運用部会
		1.1.26	日本電気との定例打合せ会議(第39回)

データベース登録件数(平成元年2月1日現在)

1. 北大 DB 登録雑誌書誌件数

和 雑 誌	17,205	洋 雑 誌	17,216	計	34,421
-------	--------	-------	--------	---	--------

2. 北大 DB 登録図書書誌件数

和 書 書 誌	106,897	計	198,045 件	(DB 登録総冊数) 357,998 冊
洋 書 書 誌	91,148			

◆ 受 贈 図 書

本学教官著作物

[本 館]

○名誉教授

阿 部 保(訳) 詩の原理 エドガア・アラン・ポオ著 彌生書房 1988

○法 学 部

曾 野 和 明 多国籍企業問題入門 青林書院新社 1978

福 永 有 利(編著) 新種・特殊契約と倒産法 商事法務研究会 1988

○理学部・薬学部

八木康一・石井信一(編著) 生命現象と生化学 北海道大学図書刊行会 1988

[分 館]

○理学部・薬学部

八木康一・石井信一(編著) 生命現象と生化学 北海道大学図書刊行会 1988

◆ 人 事 往 来

○図書館委員会委員

日 合 文 雄 (応用電気研究所助教授) 63.11.1

○退 職

川 上 敦 子 (情報システム課 学術情報掛) 63.10.30

○採 用

斎 藤 雅 子 (情報システム課 学術情報掛) 63.12.1

北海道大学附属図書館報「楡蔭」(通巻77号)

1989年2月28日発行 発行人 斎藤現太郎

編集委員 達 昭二(長)・久原秀志(図)・山口國雄(図)・高砂 慶(図)・宇野洋子(理)

片桐和子(農)・伊藤秀治(獣医)

発行所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北8条西5丁目 電話代表 716-2111(2967)

印刷所 文栄堂印刷所 札幌市中央区北3条東7丁目 電話代表 231-5560・5561